

文型指導における「文脈欠如」の問題点

日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に

太田陽子

キーワード

はずだ 文脈 機能 日本語教科書 文型指導

1. はじめに

個々の言語表現は、常に特定の文脈⁽¹⁾の中にあり、その中でこそ機能を発揮し、伝達が実現するものである。ところが日本語教材では、「文型」として表現を抽象化するにあたって個々の表現が文脈から切り離されてしまい、その結果、適切に表現を生み出すためには不十分な提示となってしまうことがある。本稿ではそうした現行教材の抱える問題点を、ハズダ⁽²⁾という表現の扱われ方を通して具体的に見ていくことにする。

ハズダという表現は多くの教科書において、初級後半から中級の初めに指導される項目であるが、学習者にとってはなかなか適切な使用が難しいものの1つである。その理由には、ハズダそのものもつ意味の複雑さや、「だらう・～にちがいない・べきだ」等の類義表現との区別の難しさがあると思われる。

(1) 川口2000では「文脈化」の概念を「特定の語彙・文法項目を含む文や文章が『どういう文脈で』つまり『だれからだれにむけて』『どういう目的をもって』発信されるのかを記述すること」としている。本稿もそれに習い、伝達に関わる人物とその人物の伝達行為における意図を「文脈」と捉える。

(2) ハズダとカタカナ表記をすることで、「はずです・はずだ・はずなんです」等、未完了形かつ肯定形で使用されるものすべてを代表させる。「はずだった・はずじゃない・はずの」といった完了形・否定形・連体形の本稿の分析対象からはのぞくことにする。

(1) *空が曇っているから、雨が降るはずである(だろう・にちがいない)⁽³⁾

(2) *何かをする前、私たちは深く考えるはずだ(べきだ)

現行の教材は学習者のこのような混同を防ぎ、ハズダという表現を習得するための適切な説明や練習を行っているといえるだろうか。こうした問題意識から、本稿では初級から上級の日本語教科書15種類⁽⁴⁾を対象に、現行教材の問題点の観察・分析を行う。

2. 日本語教科書におけるハズダの文法説明とその問題点

2-1. 学生用の文法解説の傾向

まず、各教材ではハズダという表現についてどのように説明されているのかを見るために、学習者に向けた解説のある12種⁽⁵⁾の教材の文法解説部分を観察した。以下に、導入される時期と用法 説明の内容 対訳 類義表現との比較、の4点について述べる。

導入される時期と用法

初級教科書6種類においては、初級の最終段階(概ね初級の3/4が終わった頃から最終課までの時期⁽⁶⁾)にいずれも「みこみ」用法⁽⁷⁾のみが取り上げられていた。また、「さとり」用法に言及する教科書は中級以降になっても多くはなく、初中級・中上級・上級で各1種類ずつであった。

説明の内容

ハズダの基本的な意味についての説明には、例えば以下のようなものがあ

(3) (1)(2)とも市川1997より。ハズダの部分以外の誤用についてはここでは訂正して掲載する。

(4) 本稿末尾の【分析対象とした教材】参照。例文だけでなく、練習問題や本文、付属のワークブックの中の表現も対象とした。以後、例文や説明を載せる場合は()の略称を用いて出典を示す。特に載せないものは筆者の作例である。

(5) 上記15種のうち、特に解説を載せない(外)(テ)(文)を除いたもの。

(6) 以下に[ハズダ提出課/全体の課の数]の形で提出時期を示す。(み)[46/50] (S)[24/24] (外)[27/28] (東)[32/46] (げ)[19/23] (モ)[11/15]

(7) 「みこみ」「さとり」は高橋1975の用語。「みこみ」は「予定や推定など決まりや確かさの見込みを表す用法」、「さとり」は「『ナルホドソウイウワケダ』という道理のさとりを表す用法」とされる。

る。(斜体は本稿筆者による強調)

(3) the speaker implies that he/she has *grounds* to think so, that it is his/her own *judgment* and that he/she is quite *sure* of it. (み)

(4) express one's *conjecture* with *certainty*. (中)

ハズダの文法説明では、このような「確信を持つ」「推測を表す」「話し手の判断である」「確たる根拠がある」という点が重要なポイントとして言及されることが多い。ただし、そのうちのどの点に触れて説明するかについては、表1のように各教科書で様々である。

表1

	み	S	モ	げ	東	ど	J	中	生	話	国	自
確信を持つ		×							×	×		×
推測	×	×	×	×					×		×	×
話し手の判断			×	×		×	×	×		×		
根拠がある				×			×	×			×	

対訳⁽⁸⁾

ハズダの意味合いを訳出するためには、英文では次のように様々な訳語があげられていた。

I'm sure / I expect be supposed to / be expected to
should / would / ought to / must be natural / be reasonable
surely / with confidence / no wonder

また、中国語では「應該～/会～」の2つが対訳として挙げられていた。

類義表現との比較

類義表現との相違については、特に触れない教材のほうが多い。説明の際に言及されていたのは、「だろう/でしょう」(初級2種、中上級1種)、「～に違いない」(中上級1種)、「わけだ」(中級1種)、「べきだ」(中上級1種)、「つも

(8) 英語の例は対訳や例文の訳がある9種(み/S/げ/ど/東/J/中/生/国)の教材から。中国語は中国語解説のある3種(み/東/ど)から収集。

りだ」(中上級1種)の5つの表現であった。それぞれのハズダとの相違点は、概ね以下のように説明される⁽⁹⁾。

- | | |
|------------|----------------------------|
| 「だろう/でしょう」 | 主観的で単純な予測、推測の場合。 |
| 「～に違いない」 | 直感を基にした推測の場合。 |
| 「わけだ」 | 話し手や聞き手がその状況に、より強い納得を示す場合。 |
| 「べきだ」 | 話し手が、当然である、正しいと思っている場合。 |
| 「つもりだ」 | 自分の将来の意志的な行動の場合。 |

2-2. 文法解説の問題点

これらの文法解説には大きく3つの問題点があると考えられる。

【問題点1】教科書によって説明の態度が様々で、確定した説明がないこと。

たとえば

- (5) 「はず」 is not used for making predictions, (モ)

と、述べられている教科書もあれば、

- (6)judging that "something will surely take place or must be in a certain state" (東)

と説明されるものもある。また、初級では多少は用法が限られて提示されるのは仕方がないことかもしれないが、中級以降の教科書においても、「推測」と説明されたものは「推測」の用例しか載せておらず、次のような推測行為のない他の用法には対処できなくなっている。

- (7) 5時にお約束したはずなんです.....。

こうした説明では、その教材におけるハズダの意味の理解はできても、ハズダという表現の真の習得にはつながりにくいのではないだろうか。ハズダをどのようなものとして学習者に提示し、最初に触れる用法として何をどこまで示すか。そして、その後、どのように用法を広げていけばいいのか、といったことに対して、十分に考えられているとは言えないように思う。

(9) ただし、どのような場合にはハズダではなくこれらの他の表現を用いることになるのか、という説明であり、各類義表現の用法を総括的に解説しているわけではない。

【問題点2】説明が抽象的で理解しにくいこと。

また、現在行われている説明も、学習者がすぐにそれを利用して表現を生み出していくには、抽象的すぎるだろう。例えば、

(8) 「はずだ」は確かな根拠をもとに当然そうだと推測する。(話)

という説明は代表的な解説の1つだといえるが、それでは何が「確かな根拠」となりうるのだろうか。各教材では「計算・論理的思考の結果、過去の経験など(話)」、「客観的情報や知識(S)」、「知識、事実、理由、論理(東)」、「確かな証拠、情報、記憶(生)」といろいろとあげられるが、それでも(1)で取り上げた、

(1) *空が曇っているから、雨が降るはずである。

のような、「空が曇っている」という事実から「もうすぐ雨が降る」と推測したものがなぜハズダでは表せないのかの説明とはならないだろう。また、

(9) 話し手の判断を表し、確信を持っている(み 本文は英語・(3)参照)

といった説明も代表的なものの1つであるが、それではなぜ、話し手は「確信を持って判断している」にも関わらず、用言の言い切りによる断定を避け、ハズダを用いなければならないのだろうか。

(10) シャツが2200円、靴下が800円ですから、合計3000円のはずです。(東)

(11) A：この皿はしょうぶですか。

B：これはプラスチックだから、丈夫じゃないはずです。(外)

(10)や(11)は話し手が「確信を持って判断」している事実であるが、なぜそれぞれ「3000円です」「丈夫じゃありません」と言わないのか学習者は疑問に思うのではないか¹⁰⁾。つまり、こうした文法解説は、多くの用例から抽出される性質ではあっても、実際に学習者が具体的な文を作ろうとする際に、何のためにわざわざハズダを用いるのかがわからないままで、あまり助けとはならない可能性がある。同様の理由で、類義表現との相違点も、こうした抽象的な説明で

(10) このように「あの店は24時間営業だから(今もあいている)はずだ(東)」「塩は入れていないから(しおからくない)はずだ(外)」というように、前件から導かれる事実を考えて代入していく練習はほとんどの教科書で行われている。ハズダの本質を理解するための練習であるが、ハズダがなくても言えるのではないかと考えられるものが多くある。

は適切な使い分けに結びついていかないと考えられる。すなわち現行教材の文法解説の問題点は、次のように言うこともできる。

【問題点3】形と意味の説明中心で、「どんな状況で・どのように」用いるかについてはほとんど述べられていない。

現行教材におけるこれらの説明では、解釈と知識の整理にはなっても、表現を生み出すための情報とはならないのではないだろうか。

ただし、実際の授業においては、解説書の説明よりも、教科書の例文や練習の中の具体的な表現を通して学習者は理解を深めていくと考えられる。そこで次は教材中の用例の傾向を観察し、提示の適切性を文脈と機能という観点から見ていくことにする。

3. 日本語教科書におけるハズダの用例・練習とその問題点

3-1. 用例・練習の傾向

分析の対象となった教科書の用例・練習には、共通して以下の3つの傾向が見られた。

「～から（理由）」と共に使われる用例が多い。

全199例において見受けられる文の特徴とその割合は【表2】の通りであった。

表2

	～から ～はずだ	～{と/ば/たら/ なら}～はずだ	単文	その他の 複文	単文(～はずだ) +けど/が/のに
初級・初中級	59%	6%	29%	1%	5%
中級以上	45%	18%	30%	3%	3%

「～から（理由）」とともに用いられる用例が多いことがわかる。中級以上になると、仮定表現（と・ば・たら・なら）とともに共起する用例も増えてくる。

問答形式の練習が多い。

(12) A：鈴木さんは、まだいますか。

B：かばんがあるから、まだいるはずです。(S)

のように「～から（理由）」と共に現れる用例が多くなる一因は、練習の傾向によるものだと考えられる。練習は、まず代入などで接続の語形式を確認した後、(12)のように問答形式を用いて、Aの問いかけに対し、Bがある根拠（かばんがある）を「～から」を用いて挙げ、それによって類推される判断（まだいる）を述べるという形がとられることが多く、初級・初中級では7種類すべての教科書で、中級以上でも3種類で行われている⁽¹¹⁾。

初級でよく出現する用例というものがある。

以下の(a)～(d)の用例は初級・初中級の教科書の中に高い頻度で現れるものである。中級以降においても扱われることがあり、教材におけるハズダ導入の「典型的な例」だとすることができるだろう。

(a) 到着時間に関するもの

(13) 今、4時8分ですから、あと2分でバスが来るはずですよ。(み)

(初級・初中級 6 / 7種 中級以上 1種)

(b) 大学や行事へ来るかどうかに関するもの

(14) A : ミラーさん、今日来るでしょうか。

B : 来るはずですよ。きのう電話がありましたから。(み)

(初級・初中級 4 / 7種 中級以上 3種)

(c) 言語能力を推測するもの

(15) A : 田中さんは中国語が上手ですか。

B : 上手なはずですよ。10年も北京に住んでいましたから。(東)

(初級・初中級 5 / 7種 中級以上 3種)

(d) 営業・休業に関するもの

(16) 今日は日曜日だから、銀行は休みのはずですよ。(外)

(初級・初中級 5 / 7種 中級以上 1種)

いずれも客観的に決まっている事柄ではあるが、「今ここ」では確認ができないもので、かつ話し手が判断の根拠となる情報を持っているという状況の身

(11) このタイプの練習がなされない中級以上の教科書は、類義表現との使い分けを練習するものか、特に練習を載せず解説と例文のみが載っているものである。すなわちハズダそのものの練習を試みるテキストにおいては、そのすべてでこのタイプの問答練習が行われているということである。

近な例となっている。

こうした ~ の傾向は、ハズダの「根拠のある話し手の判断」という意味を理解させるといった目的から生じている。学習者は「~から(理由)」を使って根拠を述べ、それに基づいた自分の判断を提示する練習を繰り返してハズダという表現を身につけていくのである。しかし、ハズダを適切に使用していくためには、こうした意味の理解だけで十分だと言えるだろうか。実は学習者にとっては、このように根拠を述べて判断を提示すること自体が難しいのではなく、どんなときに、何のために、ハズダを用いて自らの判断を提示するのかということがわかりにくいのであり、そのために適切な使用に結びついていかないのではないだろうか。次に、こうした教科書の中の用例や練習を文脈と機能という観点から見ることで、問題点を考えていくことにする。

3-2. 用例・練習の問題点

3-1で見たような用例や練習は、一見したところでは、学習者に対し具体的な状況におけるハズダの使用例を提示しているように見える。しかしこれらの用例や練習は一文や簡単な問答形式で提示され、その表現の文脈からは切り離されているため適切な文脈設定が欠如しており、表現を生み出すための提示方法としては不十分な点が多々見受けられる。以下に、用法の未整理 コミュニケーション上の機能の不在 不明確な話し手の「資格」 類義表現との使い分けの視点の不足という4つの観点から、問題の所在を見ていくことにする⁽¹²⁾。

3-2-1. 用法の未整理

話し手がどのような時にハズダを用いて判断を提示するのかを考えた場合、ハズダには大きく 未知の状況に対する話し手の確信を持った推測的判断の提示 すでにある現状に対する不審や驚きの表明 腑に落ちない状況にあった現

(12) 本稿のテーマは文脈と機能に着目した教材分析にあるため、これ以外の観点(出現用例の偏りや練習方法における妥当性・広がり必要性など)による問題点には特に言及しない。

状の正当性に納得を示す、という3種類の用法があるのではないかと考えられる⁽¹³⁾。しかし、何をするためにハズダで判断を示したのかという視点を欠く用例や練習では、異なった用法が未整理のまま羅列されることがある。例えば、次の例では実際にはそうではないという示唆を含むものと含まないものが混在して並べられている。

(17) 結婚していたら、もっと違った生き方をしていたはずだ。(生)

(18) 確かこのあたりに落ち着いた喫茶店があったはずだ。(生)

(17)の話し手は「実際にはそうはしなかった」ということを示唆しているが、(18)では「実際にも喫茶店はきっとある」という気持ちで表現しているものだといえる。

また、練習した用法と本文での用法が異なっている場合もあった。

(19) A：彼女は来るでしょうか。

B：きのう出席の返事をもらいましたから、()。……練習

答：くるはずです (み)

(20) もしもし、5時ごろにガスレンジを見に来てくれるはずなのですが、まだですか。……本文 (み)

(19)のように練習では「確実性の高い推測」を述べる表現として提示されているのに、本文では「実際にはそうになっていないことへの不審」を表すものとして扱われている。

異なる用法が十分に説明された上で複数提示されるのであれば問題はないが、現行教材ではこのように「この表現で行っていること」の差に十分な注意が払われず、同じ「話し手の確信を持った判断」として扱われているような例が見られた。

3-2-2. コミュニケーション上の機能の不在

また、誰から誰に向けた表現なのかという文脈が欠如すると、その用法自体も確定できず、その結果、発話の様々なコミュニケーション上の機能も読み取れないという問題も生じる。

(13) 太田2002

(21) 日本語の3年になれば、日本語の新聞が読めるはずです。(中)

(21)の文は「日本語(専攻)の3年生(に想定される日本語力)」という根拠から「新聞が読める」という判断を話し手が導き出す表現であるが、実際の会話では話し手はこの発言によって何を伝えようとするのだろうか。聞き手がもしも1年生であったら「きっとそうなりますよ」という予測を伝えることになるが、3年生を前にした発言なら「読めるはずだから(読んでみなさい)」と行動を促しているのかもしれない。またはいっこうに新聞を読もうとしない学生に対する「読めるはずなのに(なぜ読まないのか)」と非難するための表現として働く場合もある。つまり、文脈のない表現では実際の使われ方が見え、ハズダがどのようなコミュニケーション上の機能を持つかがわからないままの練習となってしまうということができる。また、

(22) 説明書を読めば、わかるはずです。(S)

(22)の表現は、もしも説明書を読んでいない聞き手に対して用いると、相手を非難するような冷たい印象を与える可能性があるが、そうした配慮は教材中にはなく、むしろこのあと問答形式の練習に進んでいく構成となっている。このように、誰が誰にどのような発話意図を持って行う表現なのかということを意識しない提示は、不適切な使用を誘発しかねない。

また同じように自らの意見を表明する上でも、話し手は文脈によって、確信を持って推測的な判断を述べている場合もあれば、断定を避けるためにハズダを用いる場合もある。

(23) メアリーさんはいい学生ですから、授業をサボらないはずです。(げ)

(24) カナダはアメリカより大きいはずです。(げ)

(23)は話し手が「メアリーさんはいい学生だ」という根拠に基づいて推測を行っているものと考えられ⁽¹⁴⁾、一方(24)は推測を行っているのではなく、「確かそうだと思うけれど……」とむしろ既存の知識を、確信の揺らぐ中で提示している表現だと考えることができる。このように話し手がハズダで判断を提示することによって行っているコミュニケーション上の機能は様々であるが、文脈

(14) もちろん文脈によっては(24)も(23)のような機能としてとらえられることもある。文脈がなく一文で提示されている以上、厳密には同じ機能かどうかの決定さえできず、その問題のほうがより大きいとも言える。

がない練習ではそれらを習得することは不可能である。

また、用例の中には、確かに根拠が提示されて判断が導かれてはいるが、そもそも誰から誰に向けてどのような状況で何のために発話されるのかがわかりにくいものもある。

(25) さっき部屋の温度を上げたから、暖かいはずです。

さっき部屋の温度を下げたから、暖かくないはずです。(外)¹⁵⁾

このような例文や練習だけでは、ハズダを使って文が作成できたとしても、表現の意図がつかめず、学習者の実際の使用へとつながりにくいといえよう。

3-2-3. 不明確な話し手の「資格」

また、「判断を提示する資格¹⁶⁾」という観点も文脈を欠いた提示では見失われがちである。

(26) 田中さんは暇なはずです。(東)

(27) 明日はテストですから、スーさんは今晚、勉強するはずです。(げ)

(26)や(27)のように、一文で前後の文脈なしに他人の状態や行動について判断すると、時として不自然さや不適切さが感じられることがある。この話し手がこのように述べるためには、たとえば人から田中さんやスーさんの状態について質問されるなど、話題の人物についての判断を述べるべき状況が設定されなければならない。

こうした資格は社会的立場(ex. 医者が患者の状態を判断)や親密度(ex. 話題の人物と日頃から親しい)などの人間関係によって保証されている場合

(15) (25)も文脈をあえて設定することはできる。この場合は、話し手も聞き手も今は部屋から離れたところにおり、聞き手がこれから部屋へ行こうとして、「あの部屋{寒い・暖かい}んだよね」と言う。しかし話し手はさっきまで部屋にいて設定を変えてきたので、聞き手の発言があてはまらないと指摘する……などである。しかしこのような複雑な文脈を用意しなければならない用例は例文として適切とは言えない。まして文脈から切り離してしまっはほとんど意味のない文となってしまうのではないか。

(16) 川口1996では「特定の意図を伝えるために、どうしてその人物が適切か」ということを「伝達関与者の資格」と名づけている。ハズダについてもこの問題が存在しているといえる。

と、質問を受けるなど情報を要求されることで資格が発生する場合があると考えられる。その意味では、教科書でよく練習される「質問に対する答え」という状況は適切なものだといえるが、⁽²⁶⁾や⁽²⁷⁾のように文脈のない一文や、前件にある人物をあげて後件を単純に予測する⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾のような導入や練習は、不適切な使用を招く恐れがある。

(28) 「 さん(クラスメートの名前)はアメリカ人ですね」
 「 さんはアメリカ人だから、英語を話すはずですよ。」(げ)¹⁷⁾

(29) アンヌさんはボーイフレンドもできて大学院にも合格したから、
_____。(答：うれしいはずですよ。)(「」)

どのような人物が誰に対して何のために発話するのかという文脈設定を欠いた練習の持つ弊害の1つである。

3-2-4. 類義表現との使い分けの視点の不足

また、文脈なしに「ハズダを使って答える」ことだけを練習するのでは、他の類義表現との相違も見えにくいのではないかと考えられる。

(30) Q：高橋さんは車がありますか。

A：_____。(み)

これは「～から」で根拠をあげ、ハズダを使って話し手の判断を述べるように指示された練習であるが、こうした質問には

(31) ええ、高橋さんの家はお金持ちだから、たぶんあると思いますよ。

ありますよ。この間乗せてもらいましたから。

よくドライブに行くといっていたから、あるんじゃないですか。

など、様々な回答方法が考えられ、どれも「ハズダ」を用いるよりもむしろ自然なものだと考えられる。「高橋さん」および「高橋さんの車」について学習者は何の関連知識も持ち合わせていないのであるから、単なる推測や想像で答えざるを得ず、そうした練習では、「ハズダ」の答え方と「と思う」「きっと

(17) 『げんき』教師用指導書のハズダの導入方法例。

(18) 実際には、ハズダを使うだけの根拠とならない理由を挙げてかえって不適切な文を生み出させてしまうのではないだろうか。

だ」などの違いは現れない¹⁸⁾。ハズダを練習するためには、話し手が何のためにハズダで述べたいのかがはっきりとわかる状況を設定しなければ効果的な練習にはならないといえる。

以上のことから、現行教材の用例や練習は、ハズダを用いて表現する「話し手の意図」と「話し手の位置づけ」、また「ハズダという表現を必要とする状況」などの設定が不十分なものが多く、実際の言語使用に結びつきにくいと言うことができよう。

4. ハズダの文型提示の留意点

3.で見たように、現行教材におけるハズダという表現の提示を文脈の観点から見直すと、用法の分析が不徹底なだけでなく、ハズダの持つコミュニケーション上の機能にも無頓着な練習となっていることがわかる。このような「根拠から導かれる話し手の判断」という意味と、「普通体+ハズダ」という形式だけにとどまる練習では、実際に表現を生み出す練習としては不十分だといえるだろう。最後に4章では、日本語教材中の「典型的な例」を学習者の起こしやすい誤用と対照しながら観察することで、一見単純な練習も実は慎重な用法分類とそれを支える文脈の設定が必要であることを確認し、文型提示の留意点をまとめていくことにする。

4-1. ハズダの表す文脈の複雑さ 初級学習者の起こしやすい誤用から

3-1で教材中の用例・練習の傾向を観察し、「根拠をあげて話し手の判断を述べる」という練習が扱われる中で、特に4種類の用例が多く取り上げられていることを見た。しかし、「話し手の判断を述べる」といっても、その述べ方を支える文脈は単純ではないようである。たとえば、初級・初中級の教科書7種類のうち4種でとりあげられた大学や行事へ来るかどうかの例、

(14) A：ミラーさん、今日来るでしょうか。

B：来るはずですよ。きのう電話がありましたから。(み・再掲)

という用例を利用して、(32)のように、

(32) (伝言として)

?? 「先生、ミラーさんは今日来ないはずです。けさ電話がありました。」

と学習者がクラスメートの欠席の伝言を教師に伝えるのは適切な使用ではない。ハズダはあくまでも話し手の判断として述べる、という述べ方なのであり、伝言を伝えるという機能を果たすことはできないのである。したがって⁽¹⁴⁾も、「電話」という根拠で「ミラーさんが来る」ということがわかっただけではなく、「電話はあったけれど、来るかどうかは未決定で話し手の判断が必要となる」という特別な文脈、例えば、

- (33) 時間になっても現れないミラーさんを心配して、クラスメートがミラーさんは来ないのではないかと話をしている。しかし話し手は昨日ミラーさんと電話で話したという情報を根拠に、自分は「来る」と思うという判断を提示する。

といった場面設定が用意されなければ適切な使用とはならないと考えられる。

一方、初級教科書7種類中6種が扱っている「到着」に関する用例については、⁽³⁴⁾の「～と思います」が不自然であることからわかるように、自分の判断だということよりもむしろ「時刻表等の情報によるとそう言える」ということが強く意識される表現である。

- (13) 今、4時8分ですから、あと2分でバスが来るはずです。(み・再掲)

- (34) ?? 今、4時8分ですから、あと2分でバスが来ると思います。

しかし、⁽³⁵⁾のようにスケジュールに基づいているということだけでは使えない。

- (35) ?? 「先生、金曜日にテストがあるはずです。難しいですか。」

⁽¹³⁾のような用例で「ハズダ」の使用を支えているのは、荷物やバスのようなものの持つ到着時刻の「遅延」の可能性だといえる。つまり、「根拠のある確信を持った判断」ということだけではなく、「しかし断定はできない」という状況がこれらのタイプのハズダの使用には必要であることがわかる。

したがって、

- (15) A：田中さんは中国語が上手ですか。

B：上手なはずですよ。10年も北京に住んでいましたから。(東・再掲)
のような能力を推測するものも、Bは田中さんが中国語を話すのを聞いたこと

がないなかでの判断であり、(28)でもあげたような、

(28) さんはアメリカ人だから、英語を話すはずです。(げ・再掲)

のような単純な文脈や、ほぼ常識として話し手も聞き手もわかっているような
営業・休業に関する例文、

(16)今日は日曜日だから、銀行は休みのはずです。(外・再掲)

といったものは、「確信を持った判断」ではあっても、ここで練習されている
文脈としては不自然だということができる⁽¹⁹⁾。

4-2. ハズダの文型提示の改善すべき点

このように、ハズダという表現は単純にある根拠から何かの判断を推測する
というだけではなく、実際には複雑な文脈設定が必要な表現であることがわか
る。このようなハズダを効果的に導入・練習するためには、少なくとも以下の
3つの意識を現行教材に取り入れていくべきであると考える。

はっきりとした文脈の中での練習

上述したように、ハズダという表現には文脈的な要素が不可欠であることを
意識し、これまでのような単純な一文や問答練習ではなく、「判断を示す人
物」と「その判断を示す意図」すなわち「文脈」ををはっきりと設定した上で
練習する必要がある。

そのためにはまず、ハズダの用法とそのコミュニケーション上の機能を明ら
かにしていかなければならない。ハズダという表現は、どんなときに、何のた
めに使用されるのか、さらなる整理と記述がなされるべきである。

なぜ他の表現ではなく、ハズダを用いるのかを意識した練習

ハズダの使用にあたって難しいのは、話し手が意図の実現のためにハズダと
いう表現を使うかどうかを選択しなければならないことである。すなわち、ハ

(19) (28)や(16)のように事実と思われる事柄にあえてハズダを用いると、話し手の判断を現
状と対比させる中での解釈が発生する。したがって、「アメリカ人だから英語が話せ
るはずだ」という考えは現在のアメリカ社会では通用しなくなっている。「日曜日だか
ら銀行は休みのはずだが、どこでこんな大金を調達したのだろう」など、現実の状況
とハズダで示す判断が一致しないことを主張する別の文脈として機能していくこと
になる。(太田2002参照)

ズダを実際に使用していくためには「なぜ今ハズダを用いて表現するのか」の意識化が必要なのであり、現行の練習に見られるような「ハズダを使って答えなさい」という練習、つまりなぜこの状況でハズダを使うのかが意識されない練習はあまり意味がないだろう。

また、類義表現との相違も、意味の中にだけ求めるのではなく、他の類義表現でも表せる表現なのか、それともハズダでしか表せない表現なのかを明らかにしながら、それぞれの文脈を提示していくことが類義表現同士の類似性と弁別性を習得するために有効であると考ええる。

スパイラル化した練習

ハズダには多様な機能があり、それを支える文脈も様々なのではないかと考えられる。そのために現行教材ではしばしば異なる機能の用例が混在してしまっているのだと思われる。したがって、初級後半や中級前半の1課分だけでハズダの習得を試みるのではなく、中級・上級と進みながら、書き言葉も含めて、各機能を網羅していくようスパイラル化した練習をしていくという姿勢を持つことが必要なのではないかと考える。

5. 今後の課題と展望

本稿ではハズダという表現を導入する際に、現行の教材では意味と形の説明や練習にとどまり、実際に使用するために不可欠な文脈が無視され、用法が未整理のまま機能が不明確な練習となっていることを指摘した。そしてこうした文型提示は、表現を生み出すための情報としては不十分であるとの問題提起を行った。それを補うためには教師が適切な場面を設定していくことが必要であるが、現状ではその作業は個々の教師にゆだねられており、効果的な教室活動や学習者の実際の言語活動に結びついていくような文法記述は十分には行われていないようである。機能をもとに文型をとらえなおし、文脈をあきらかにした教材開発が必要なのではないだろうか。

今後はハズダが実際に使用される状況をさらに観察し、その用法とコミュニケーション上の機能の全体像を明らかにすると共に、ハズダの使用される文脈条件を洗い出していく作業が必要である。類義表現との使い分けも、文脈という視点から記述することでより明確なものとなるのではないかと考えている。

また、今回は扱えなかった「はずだった・はずの・はずがない」などハズダの他の形式についても考察を試みたい。さらに、日本語教材における文脈への視点の欠如は、ハズダ以外の文型についても考察されるべきだと考えている。今後の課題としたい。

【分析対象とした教材】()内は本稿中での略称

- 初 級：(み)『みんなの日本語初級』 / (S)『Situational Functional Japanese Vol. 3』 / (モ)『モジュールで学ぶよくわかる日本語3』 / (げ)『げんき』 / (東)『新装版日本語初級』 / (外)『初級日本語』
- 初中級：(ど)『どなたときどう使う日本語表現文型200初・中級』
- 中 級：(J)『日本語中級 J301 基礎から中級へ』 / (中)『中級の日本語』 (文)『文化中級日本語』 / (テ)『テーマ別中級から学ぶ日本語改訂版』
- 中上級：(生)『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』 / (国)『文科系留学生のための中・上級学術日本語練習ノート 国境を越えて』
- 上 級：(話)『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現 モダリティ・終助詞』 / (自)『アカデミック・ジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ 自然に使える文末表現』

【参考文献】

- 市川保子 1997 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
- 太田陽子 2002 「『ハズダ』を用いた連体修飾表現について 『安全なはずの学校』は安全か」『東京大学留学生センター紀要』12号
- 金子比呂子 2000 「『ハズダ』の意味と用法 意見文における使い方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26号
- 川口義一 1996 「日本語指導の文脈化」『日本語教育異文化間コミュニケーション』北海道国際交流センター
- 川口義一 2000 「『ナラ表現』の『文脈化』と『教材化』」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13号
- 高橋太郎 1975 「『はずがない』と『はずじゃない』」『言語生活』289号
- 吉川武時編 2003 『形式名詞がこれでわかる』 ひつじ書房